

人生を拓く

⑥8

吉田孝志さん(69)
秀美さん(67)

西町2

今月と来月は「特別編」として、前後編に分けて吉田さん夫妻を紹介します。

孝志さんは、吉田義光さん(98歳没)とわかさん(82歳没)の6人兄弟の5番目として東神楽町志比内に生まれました。中学卒業後は通信教育で高卒の資格を獲得。親は農業をしていましたが、孝志さんは身を立てるため志比内の民芸工場に3年間の年季奉公として入りました。給料は小遣い程度で、最初は親方や先輩が使う刃物を砥ぐ仕事でした。「下手な仕事をすると頭から怒鳴られ物を投げつけられた」といいます。先輩も厳しく、自分より先に弁当を食べようとするとひどく怒られたそうです。誰よりも早く仕事場に行き、皆が帰るまで帰宅できない生活でした。この経験があったため、後の人生において「何くそ、こんなことくらいで負けてなるものか」と思えるようになったとか。「親方があまりにも無理難題を言うときは、父が談判しに行ってくれた」と振り返ります。家族の支えもあり、3年間なんとか修業できました。その後独立し、東川に移住して自分の仕事場を持ちました。丸太の大きさから熊の大きさをイメージして制作する木彫りの熊づくりを36年ほど続けましたが、民芸品の衰退とともに辞め、その後はヤマト運送のメル便配達を約10年担当しま



約9年前のある日、町内のいきつけの喫茶店で日本語の勉強をする台湾人の女学生をみかけました。かつて中国から帰国した秀美さんが日本語を勉強する姿と重なり(秀美さんについては次号)、困っている人を放っておけない性分の孝志さんは「妻が中国語を話せるので、家に来て勉強しませんか」と声をかけました。それ以降、北工学園や町立日本語学校で日本語を学ぶ台湾やベトナムなど15カ国から来た留学生を家に招き、悩みを聞いたり手料理やお菓子をふるまったりしてきました。今では「日本のお父さん」として、留学生が毎日のように慕って来ます。「家にいながらにして世界各国の話の聞き、料理を食べることが出来る。まるで世界旅行しているようで、元気をもらっている」と孝志さん。部屋の壁にはこれまで訪ねて来た100人以上の留学生の写真がところ狭しと貼られています。卒業後に帰国しても、毎年顔を見せに来てくれる人もいるんだとか。

60代になり、リウマチやパーキンソン病と付き合うようになりましたが、彼ら・彼女らの笑顔に囲まれ、心はいつも晴れやかです。(次号へ続く)

俳句

数の子や浜の郷愁ひとくさり
四度目の父なき座敷雑煮食う
それなりを良しと言えども福寿草
鍋破し地味噌の味にこだわりて
口角上げて吾によろしく初鏡
初御空機上の人は故郷へ
大つごもりこの身に殖ゆる備忘録
冬ざれとゆく山ガールは連山へ
八千人が肩寄せ合う町初日の出
もがり笛覚醒つづく午前二時
「かあさんの詩」みつけたたりシクラメン
初詣合わす小さき手どんな夢
部屋中に豆もち草もち鏡もち
自動ドアなかなか開かず雪女
遊ぼうかつぶらなるかな狸の瞳

杉山 ひろのり
横田 則子
由川 真人
杉山 りつ
高瀬 潤
三島 智
若田 郁
佐々木 りえ
本田 咲
保科 なほ
斎藤 夕桜
山内 みゆ
小林 ろぼ
八田 昌代
石澤 清宏

